

● 優秀賞

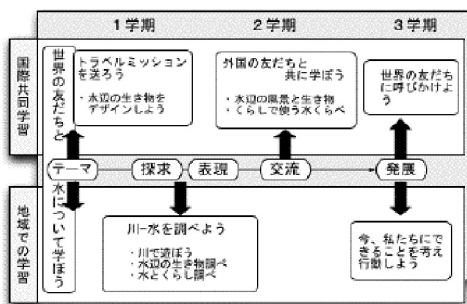
メディア活用の工夫をした 国際共同学習の実践

い わ の ひ ろ ま さ
岡山県苫田郡鏡野町立香北小学校 岩野浩昌

1 はじめに

昨年度、岡山県Y小学校の4年生は、総合的な学習の時間で、「Water Project」に取り組んだ。これは、「いのちや暮らしを支える大切な水」のテーマを共有した世界の子どもたちが、それぞれの地域で調べたことをもとに交流する国際共同学習である。日本から世界によびかけ、8カ国（南アフリカ・ベナン・エジプト・イタリア・デンマーク・ニュージーランド・アメリカ・日本）の子どもたちが参加した。

水はすべての生命を支える貴重なものである。しかし、子どもたちは、水があって当たり前と思っている。そこで、子どもたちに、水辺の生き物や水の使い方などを調べることで、水の大切さに気づかせたいと考えた。また、各国の子どもたちが調べたことを交流することで、世界の様々な水事情を学び、自分たちの環境や水との関わりを再認識できると考えた。このような理由から「Water Project」に取り組んだのである。



● 資料1 「Water Project」 年間計画

今回の国際共同学習を可能にしたのは、インターネットを中心としたメディア活用の工夫が重要な役割を果たしたからである。本論文では、国際共同学習を展開する中で、どのようにメディアの活用を工夫したか、またその過程で子どもたちがどう変容したのかを述べることにする。

2 国際共同学習を成立させるためのメディア活用の工夫

① つながりを実感し情報の共有を可能にする学習方法

国際共同学習を行うには、遠く離れた相手とつながりを実感することが大切である。また、参加者が同時に情報を共有することも必要である。そのために、トラベルミッションという学習方法を考案した。

これは、現在世界で広く行われているトラベルバディという方法を応用したものである。トラベルバディは、1対1の交流を行う時、相手にマスコットを送る。それに対して、トラベルミッションは、一度に多数の交流を行う目的で、共同学習の提案者がテーマに関するマスコットを複数の参加者に送る。参加者はマスコットが届くことで、また提案者は届いたことをインターネットで確認することにより、相手とのつながりを実感すると考えられる。そして、つながりを実感した者同士がテーマを共有し、調べたことをインターネット上のホームページで交流するのである。

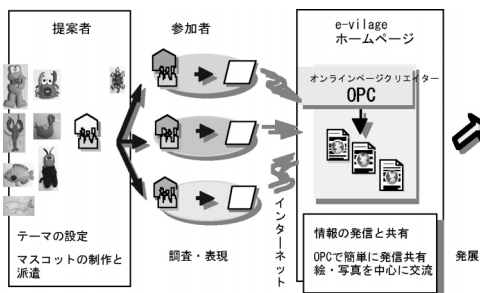
このような方法を採用すれば、複数の参加者で行う国際共同学習を可能にすると考えた。

②言葉の壁を克服する工夫

外国の子どもたちと共同学習をするときは、言葉の壁がある。言葉を全く使わない交流は無理だとしても、少しでも言葉の壁を低くする方法はないだろうか。そこで、自分たちが調べた内容を主に絵や写真で表現し、説明や言葉をできるだけ簡潔にすれば、子どもでもホームページ上で交流が行えると考えた。

③簡単に情報発信ができるシステムの利用

専門的な知識や技能を必要とするホームページの作成は、子どもたちにとって難しいものである。そこで、オンラインページクリエーターというシステムを使うことにした。これは一般的なブラウザソフトから画像や文章を送り込み、簡単な操作でホームページを作成することができるシステムである。これを使えば、専門的な知識や技能がない子どもたちでも、自分たちが調べたことを簡単に発信できると考えた。



●資料2／トラベルミッションの学習方法とメディア活用工夫

3 国際共同学習の実践のようす

①共に学ぶ相手を捜す

国際共同学習を行うには、何よりもテーマを共有できる相手を見つけることが必要である。そこで、インターネットを使った国際的な教育プロジェクトを数多く手がけている国際コミュニティe-village上で提案し、参加者を募った。その結果、日本を含め8カ国計10団体が参加することになった。参加団体のほ

とんどは小学校のクラス単位であった。中には、民間教育団体もあった。ホームページの制作や運営についてもe-villageの協力を得て進めることにした。このようにして、国際共同学習の環境づくりを行った。

②教師から国際共同学習を提案する

総合的な学習を始めるにあたっては、子どもたちと話し合っ、水辺の生き物調べや水をくらしの中でどのように使っているかを調べることにした。そこで、「水のことを外国の友だちといっしょに勉強してみないか。」と子どもたちに提案した。すると、子どもたちは「やろう。やろう。」とのってきた。しかし、中には「どうやっていっしょに勉強するの。」「私たちは外国の言葉を知らないよ。」と疑問や不安を口にする子どももいた。

子どもたちは、ホームページを見たことはあるが、インターネットを使った他校との共同学習の経験はなかった。疑問や不安ができて当然である。そこで、いくつかの国際共同学習のホームページを見せて、「インターネットを使えば、自分たちが調べたことをお互いに教え合うことができるよ。」と説明した。子どもたちは、できるということはわかったが、自分たちがするのだという実感がまだもてないようであった。

③マスコットが届いた

相手とのつながりを感じさせるために、マスコットを送った。「いっしょに学ぶ相手に水辺の生き物をマスコットにして送ろう。」と提案したところ、子どもたちはすぐに賛成した。そこで、デザインを子どもたちに考えさせた。身近な水辺の生き物から想像上の生き物までたくさんのデザインがでた。その中から、子どもたちが選んだものを制作した。制作は、保護者の協力を得た。保護者の方も喜んで作ってくださり、かわいいマスコットが出来上がった。子どもや保護者の思いが詰まったマスコットは海を渡って行った。

届いたところからは、マスコットをもった



●写真1／マスコットとデンマークの子どもたち

子どもたちの写真が、ホームページに掲載されだした。その写真を食い入るように見つめた子どもたちは、「うわあー、すごい。本当に届いている。」「ぼくも人形になって行ってみたいな。」と、驚きと喜びの声を上げた。子どもたちは相手とつながったと実感したのだろう。それまで、持っていた疑問や不安が消えた。

子どもたちをつないだのはマスコットであった。しかし、インターネット上で確認できたからこそ、つながりを実感したのも事実である。

④情報を学級内で共有する

いよいよ、国際共同学習がスタートした。参加者から、メッセージや活動のようすがホームページに掲載されだした。そこで、集まった情報を学級でどのように共有するかを考えた。

教師があらかじめ掲載された情報に目を通した。新しい情報が入っていれば、印刷して簡単な日本語訳をつけた。

子どもたちは、国ごとに担当グループを作った。そして、総合的な学習の時間にホームページをチェックし、新しい情報が入っているかどうか確認した。新しい情報は印刷し、教師から日本語訳をもらい、みんなの前で紹

介した。また、自分たちが情報を発信する場合も、担当の相手に向けて送り、みんなの前で発表した。

これらの情報は、「世界の水情報」という掲示板を廊下に作って、そこに貼り出し、常に全校の目に触れることができるようにした。子どもたちは、外国から情報が入るたびに、「入っている。入っている。」と喜んだ。「先生、これ何と書いてあるの。」と、内容を知りたがった。「今日は新しい情報が入っているかな。」と、楽しみにするようになった。

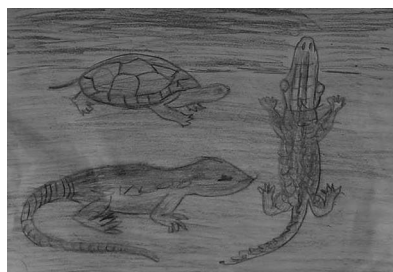
⑤絵で伝える

「水辺にどんな生き物がいるか、絵に描いて教えてあげよう。」と、子どもたちに提案した。これなら、言葉がわからなくても取り組むことができる。

子どもたちは、水辺の生き物調査で見つけた水生昆虫の絵を描き出した。それだけではなく「先生、ぼくが池で釣った魚を描いてもいい。」と、言い出す者もいた。子どもたちは意欲的に取り組んだ。

ベナンやニュージーランドの参加者からも水辺の生き物の絵を掲載してきた。その中に、イルカやワニの絵があった。それを見た子どもたちは、自分たちの近くにいる生き物との違いに驚いていた。

言葉の壁を乗り越えるには、子どもたちだけの力では無理がある。そこには、教師など大人の支援が必要である。しかし、このように絵や写真を多用すれば、言葉のわからない子どもたちでも交流することができた。



●写真2／ベナンの子どもたちが描いた絵

⑥集まった情報を活かした授業

交流が進むにつれて、水に関する様々な情報が数多く集まってきた。そこで、情報の交流だけではなく、これらを使った授業はできないかと考えた。各国の情報の中から、自分たちの暮らしを見つめ直すものや、世界の水問題について学ぶことができるものを選んで、授業をすることにした。

・自分たちの暮らしを振り返る

デンマークから、家庭での1週間の水の使用量を調べたグラフが送られてきた。このグラフを見せながら、「私たちも家庭の水の使用量を調べてみないか」と提案した。子どもたちは、早速、水道メーターの数字を毎日記録し始めた。

その結果、1日で約1～2立方メートル、1週間で約6～14立方メートルだった。子どもたちは、家庭によって水の使用量がかなり違うことに気づいたのである。その後、町内の水の使用量についても調べた。それは、2011年度に約768000トンであった。

子どもたちは「他の国の使用量も知りたい。」と、自分たちの調査結果を世界に向けて発信した。すると、ニュージーランドから

の調査結果がホームページに掲載された。

ニュージーランドのkaikouraは3000人ほどの小さな町である。そこでは、1年間に町全体で949000トンの水を使っていた。柵原町の半以下の人口なのに水の使用量が多いので、子どもたちは驚いた。

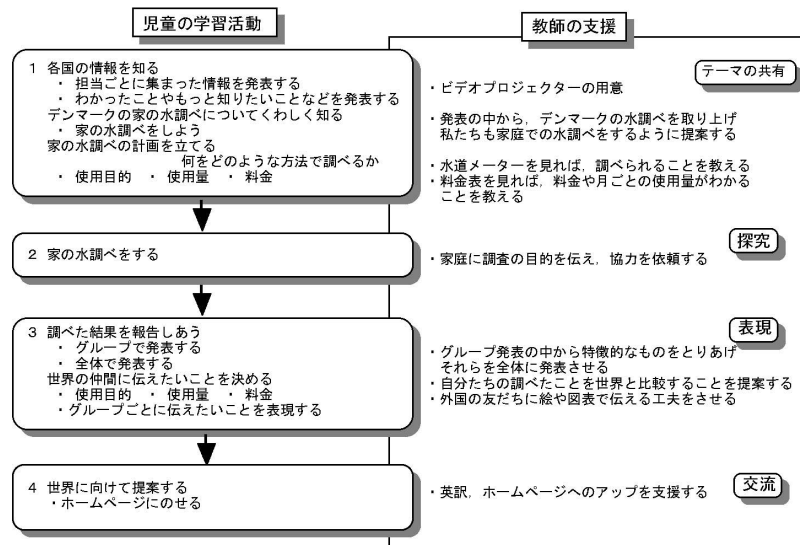
これをきっかけにして、子どもたちは水をどのように使っているか調べだした。その結果、水の無駄遣いに気づき節水する活動に取り組んだ。

デンマークの学習に影響を受けた日本の子どもたちが自分たちの暮らしを調査し、世界に向けて発信した。それに応えたニュージーランドが調査結果を送ってきた。このように、各国が連携した結果、より深く自分たちの暮らしを見つめ直すことができたのである。

・世界の水問題を学ぶ

アフリカ諸国から送られた情報は、水に対する危機意識が強かった。

中でも、ベナンから送られた写真に子どもたちは驚いた。それは、屋根から落ちる雨水をバケツで受けている少年が写っていた。(ベナンでは、都市部の周辺で水道の施設が整っていないところは雨水を利用すると説明



●資料3／くらしの水調べ 学習の流れ



●写真3／雨水を受ける少年

があった) 子どもたちは、「あの水をどうするの。」「まさか、飲んだりはしないよね。」と、信じられないようだった。

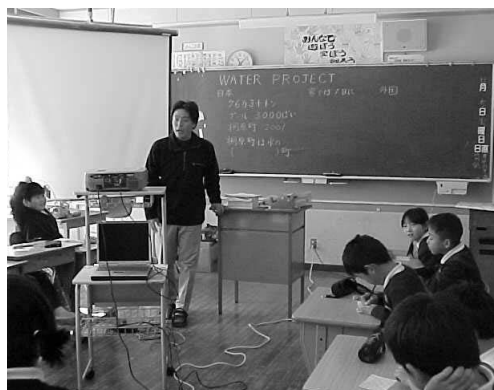
また、ベナンからは次のようなメッセージも送られてきた。

「この地球は、青い水の星。63億の人々が住んでいる。15億の人々にはきれいな水がある。でも、他の何億もの人々には、汚れた水しかない。汚れた水もたりない。そのため、毎日、多くの命がなくなっている。なぜ、この星は、どこにでも水がないのか。青い水の星なのに。」

そこで、これらの情報をもとにして世界の水問題を学習することにした。

アフリカ諸国の情報を取り上げ、子どもたちに「どうしてアフリカの人たちは水のことをとても心配しているのだろう。」と尋ねた。すると、子どもたちは「きれいな水がないから。」「暑いから水が足りない。」と答えてきた。

アフリカの干ばつの様子を表す写真を子どもたちに見せると、そのすさまじさに驚いていた。それに加えて、世界の水問題を教えた。水が原因で1年間に500～1000万人が死んでいること、12億人が安全な飲料水が確保できないこと、2025年には48カ国が水不足になること、水に関わる病気で子どもたちが8秒間



●写真4／授業のようす 世界の水問題

に1人ずつ死んでいることなどを伝えと、子どもたちはそのつど驚いていた。

「先生、日本は大丈夫なの。」と真剣に尋ねてきた。「日本はおそらく心配ないだろう。」と答えると、「よかった〜。」と安心していた。しかし、このままでは、子どもたちは自分たちの問題としてとらえられない。

そこで、「日本は1年間に400億立方メートル(東京ドーム約32000杯分)の水を農作物や木材として世界から輸入している。だから、世界の水が足りなくなると、日本は食べ物や木材が足りなくなる」と教えた。「そうなのか、そりゃ困るな。」と、子どもたちは世界の水問題が私たちのくらしに関係していることを理解した。

この授業は集まった情報をもとにして、発展的に世界の水問題を学習した。水に対する危機意識を持った子どもたちは、「今、自分たちにできることはないか」と、真剣に考えるようになった。

⑦自分たちの想いを伝える

世界の水問題を知った子どもたちは「今、自分たちに何ができるか」を話し合った。その結果、「世界の水問題を解決するために、自分たちの考えをポスターにして世界に伝えよう」ということになった。

子どもたちは、世界の水問題を解決するた



●写真5／子どもの描いたポスター

めに自分たちが考えたことをポスターにしてあらわした。水をきれいにする機械を描いた絵、水の入ったペットボトルをプレゼントする絵など、子どもたちは実にユニークで楽しいポスターを描いた。中でも、地球を子どもたちがいっしょにそうじをしている絵を描いた子どもがいた。その子が「先生、外国の人といっしょにクリーン作戦をしたら、地球がきれいになるよ。」と言った。そして、うれしそうにパソコンに向かい、世界の共に学ぶ仲間へ向けて発信した。

国際共同学習に不安や疑問をもっていた子どもたちも、自分たちの想いを世界に伝えるまでになった。それは、今まで共に学んできた相手がいるからである。インターネットが世界の子どもたちをつないだと言える。



●写真6／川のクリーン作戦を行う子どもたち



●写真7／マスコットと共に学ぶニュージーランドの子どもたち

4 成果と課題

①成果

子どもたちは、共に水を大切にしよう和世界に向けて提案するまでになった。

日頃の暮らしの中でも、水を大切にする活動に取り組みだした。バケツに水をためて使う、川のクリーン作戦を行う、など具体的な行動を起こした。これは、外国との交流を通して世界の水問題を学んだことにより、自分たちの暮らしを見つめ直したからである。

外国とどうやって学ぶのか不安に思っていた子どもたちも、インターネットを活動のようすや自分の想いを伝える道具として使うようになった。また、インターネットを活用する中で、情報発信者と受信者としての両面から、共に学ぶ態度や異文化を尊重する態度を考え実践することができた。

今回の国際共同学習を可能にしたのは、トラベルミッションの果たした役割が大きい。マスコットを送ったことで、つながりを実感することができた。小学校の低・中学年では、具体物の持つ効果が大いに発揮された。また、インターネット上にホームページを持ったことで、情報を共有し交流をすることが可能となった。子どもたちでもホームページでの交流が行えたのは、絵や写真を多用したことやオンラインページクリエイターの果たした役

割が大きい。また、共有した情報を活用すれば効果的な授業が行えることもわかった。

②課題

今回の国際共同学習では、教師からの提案により学習を進めることが多かった。国際共同学習が初めての子どもたちにすれば当然のことである。しかし、今後子どもたちに望まれるのは、自から課題を見つけて学習を提案できることである。また、内容や目的によって、具体物やインターネットを有効に活用することである。これらの力は、国際共同学習の実践を通して身につくと思われる。

インターネットを活用した国際共同学習では、タイムスケジュールの設定などの学習環境づくり、翻訳の迅速化、集まった情報の活用など、指導者の力量が問われる。今後は、教師もまた積極的に国際交流や共同学習の経験を積み、日本の子どもたちが進んで世界の子どもたちと共に学べるように指導者としての力量を高める必要がある。

5 おわりに

子どもたちにとって初めての国際共同学習ではあったが、メディアの活用を工夫すれば、世界の子どもたちと共に学べることがわかった。

世界の水問題などは、一国で解決できるものではない。世界が力を合わせて解決しなくてはならない。21世紀を生きる子どもたちに、世界と共に学ぶ体験を積ませることはとても重要である。今後、学校でもインターネットを中心とした情報通信メディアの環境はより充実する。それに対応して、メディアの活用を工夫すれば、国際共同学習の可能性は今以上に広がるだろう。これからも、日本の子どもたちが進んで参加できるような国際共同学習の実践を重ねていきたい。